
「教育力のある」社会科学系科目をめざして

——対話を育てるカリキュラム改革のための教育手法研究——

研究代表者	妻木 進吾	(経営学部)
共同研究者	松浦 さと子	(政策学部)
	奥野 恒久	(政策学部)
	鋤塚 賢太郎	(経営学部)

「人と向き合い出会う広場へ 教室での対話の出口として」

社会科学系科目部会 松浦 さと子

1. 全国市民メディアフェスへの参加

「教育力のある大学」の実現に向けた授業実践を充実させるべくキーワードとした「対話のある教室」。その空間をつくるために、本年も昨年に引き続き、全国の市民メディア活動を実践されている方々に出会い、さまざまなメディア制作の現場におけるコミュニケーションについて対話をしながら学ぶ機会をいただくこととした。現場は昨年の「大阪メディアフェス」に引き続き、全国市民メディアフェス、今年の会場は愛知県だ。2014 年は5月の連休に開催された「三河メディアフェス 2014」<http://mikawamedifes2014.com/> への参加を通じた発表活動とサブサイトへの記録活動について、その成果と教育的効果について報告する。

メディアフェスとは、2003年に名古屋で始まった全国市民メディア交流集会の略称で、これまで米子、熊本、横浜、札幌、京都、東京、武蔵野三鷹、上越、仙台、大阪、三河と続いてきた。AV機器が安価に使いやすくなり、Youtube や SNS を一般市民が利用することを可能にしたインターネットでその発信力が増し、誰もが放送局や新聞社と同様に発信でき、影響力を持つことも不可能ではなくなりつつあった21世紀初頭、マスメディアを受容する存在から、自ら送り手として表現や発信の主体となろうとする活動の広がりが、そうした集会を各地が要請したのだ。1970年代後半からケーブルテレビのコミュニティチャンネルや、コミュニティFM放送の市民番組など、ドキュメンタリーやドラマや情報番組を制作する一般の市民が夥しい数の多様な作品を発表していた。欧米に一般的であったパブリックアクセスやオープンチャンネルを目指す試みが日本にもあったのだ。しかし日本では放送行政のうでで制度にはならず、視聴覚教育としてもメディア制作はコンテストで発表することが目的となり、市民生活のなかでメディア制作が日常のものとはなることがなかった。一部の熱心な市民を除いて。

メディアフェスはそうした熱意溢れる人々の年に1度の祭典だ。学生たちはそこで、メディアをつくることが生活に直結している人々と出会う。出たがり屋や変わり者ではなく、市民生活を恙無く過ごしている人々が、メディアを介して何を語り合っているのか。5月の連休を潰してしまうことを後悔しない体験を得られるか、初参加の学生への挑戦でもある。今回は、マスコミ論A Bの受講生にも呼びかけを行ったが、開催がGWで申し込みは4月中旬であり、政策学部コミュニティメディアの研究室ゼミ生が参加することになった。

2. 地域で対話するための基礎的学力

第12回市民メディア全国交流集会 三河メディアフェス 2014は、NPO法人 チャンネルDaichiが中心となる三河メディアフェス 2014 実行委員会の主催で開催され、地元行政と教育委員会、中日

新聞社が後援した。会場は刈谷市総合文化センター4階会議室とホールが用いられた。テーマは「すぐそこにあるメディア」。メディアが特別な存在ではなく、誰もが使えるものとして、捉えられた。名古屋大学、武蔵大学、龍谷大学が開催に協力し、多彩な分科会が展開するプログラムを最後に総括するために、龍谷大学は各分野で「記録」と「報告」を受け持つことになった。各分科会で何が語られたのか、そこに参加し、聴講だけでなく質疑応答にも加わり、内容をより深く把握し、写真記録を行い、自分自身の言葉でその模様をレポートする、という役割である。ただ漠然とそこに着席してトークセッションを目撃するだけではなく、それぞれの分科会における企画者の狙いを汲み取り、報告者たちが繰り広げるパフォーマンスを効果的に紹介できるように写真や文字でサマライズするという役割である。

前年のメディフェスは秋に開催されており、(前)3回生が中心にそこに参加した学生が見事に責任を果たしただけでなく、参加した市民メディアの実践者と有機的につながり、その後も交流したということも大きく評価された。マスメディアに対し受け身の姿勢でメディアを考えていた学生にとって、自発的に自治的に責任主体としてメディアに関わり、なおかつ表現や言論を発表する人々の態度や言説に触れて、明らかに「影響を受けた」と言える。主催者が事後に本学を訪れ、著書を学生にプレゼントしてくださったほど、その働きと発表には深い感謝を寄せていただいた。学生たちも一般市民の方々、メディア活動をしている人々の前で報告する機会を得て、その後の就職活動にも役立つ「対話」「コミュニケーション」を経験した。ゼミ生となって1年以上をかけて、メディア関連の文献講読もある程度進めていたため、内容の理解も心配が少なかったこともある。しかし本年度のメディアを学び始めたばかりの新3回生に5月の開催では早すぎ、報告されている内容を把握するだけでも難度が高く、要求される水準に達するためのハードルは高かったのだが、主催者から事前に「君たちの若さが頼り、元気よくやってくればいいよ」という励ましを受けたことで、不安になりながら龍谷大学生は引き受けた。自分たちへの期待を受けとめたいという気持ち、困っているようだから助けたいという優しさゆえのように思われる。多彩なプログラムでメディアについての多様な取り組みを知り、ひとつひとつの分科会に少人数で分かれて参加し、のちに成果を持ち寄ることから学生自身の興味関心を広げることができるという学生自身が受ける大きなメリットがあるはずだと判断した。

分科会開催スケジュール（敬称略）

1 日目【5月3日（土）】

「学生が考えるコミュニティ FM」「大学生によるラジオドラマ実践」「映画制作を通じた都市文化芸術（映像・演劇・音楽・アート）人材のネットワークづくりとは」「メディアと市民でつくる地域メディア」「地域ネット TV の輪が生んだ繋がり」と発信力」

2 日目【5月4日（日）】

「碧海・西尾市民映像祭の10年。作品からわかるこのエリアの伝える思い」「私たちのまちの市民テレビ局 ～現状と未来～」」「ポスト 3.11 の社会を生きる若者の市民メディア活動報告」「市民放送局の使命と課題」「市民映画と街づくりについて」

3 日目【5月5日（月）】

「市民メディアについてみんなで語ろう（第一部）：これまでの10年」「市民メディアについてみんなで語ろう（第二部）：これからの10年」

（三河メディフェス運営委員作成のプログラムより抜粋）

この分科会プログラムからわかるように、特別な専門知識を要する内容はなく、初めて聴講、参加する人でも、理解できないことはほとんどない。しかし、これらの基底的要素である「市民メディア」「市民参加」という概念、理念を共有できなければ、報告者への共感や報告内容の理解は困難である。

3. 地域で対話するために必要であったことは

結論からいえば、本年の参加者にはかなり荷が重い作業となったということだ。最後にステージに上がり、各分科会の紹介をするのだが、10名(2名は昨年の参加学生がサポートに入った)の学生は、緊張のなかで笑顔もなく、肩に力が入り過ぎたのか龍谷大学のアピールに過剰に時間を割いてしまっていた。事前に仲間や教員に相談する時間もとれず、各分科会の理解も十分ではなかった。昨年の参加学生が行っていた分科会参加者へのちょっとしたヒアリングもできず、写真を見せながらプログラムを読むことに終始してしまった。わずか半年参加が早かったということのみであるが、昨年の学生たちとどのような背景の違いがあったかを検討すると、それはメディアに関する知識習熟度の差ではないと伺える側面が2点ある。

ひとつは、昨年の学生たちは、大阪でのメディフェス参加にあたり「業績」をひとつ持っていたことにより、参加資格を自認していたということである。業績とは、京都府のコミュニティ放送局の調査であるが、報告書を作成し、その1冊をもって自分たちの取り組みの熱意と成果を示すことができ、メディフェス参加者に伝えるべきものをしっかりと持っていたのである。コミュニティの市民メディアで活動する人々はさまざまな悩みや苦勞を抱えている。なかでも、表現を受け止めてくれる受容者(聞き手、観客、視聴者、聴取者等)が増えないこと、活動の財源確保の困難といった点は、かなり共通の悩みとなっている。そうしたことを知っているかどうかではなく、共有・体感しているかどうかは、参加者同士のコミュニケーションが熟成如何において大きな要因となる。それが昨年の参加学生には、ひとつの調査をまとめるにあたりコミュニティ放送局のヒアリングのなかで当事者に直接向き合い獲得できていた。しかし、今年の参加学生にはその点が未成熟だったといえる。

もう1点、市民メディア活動の参加者はグループ参加が多い。すなわち「仲間」との参加により、心理的な不安が軽減された環境で対話に参加している人が多い。ひとりの発表を仲間が見つめ、間違いや忘れた内容を補い、質問に助け合いながら応答している。昨年の参加学生は、共同作業により12名の学生が「仲間」としての成長をしていたため、そうした一般参加者と同様、メディフェスの記録作業にも仲間との連携で取り組んでいたのである。ところがこの点において、今年の参加学生は仲間づくりをしてこなかった。これまで協働作業の経験がなく、個人としての作業にしか取り組んでいない。そのため、「仲間」がなく、多くの見知らぬ他人のなかに知識もなく放り出されたと感じていたようだ。

4. 対話のある教室のために

「教育力」のある教育のための、「対話のある教室」。その教室を実現するための地域での対話を育むためのフィールドワークだった。地域で対話をするためには、基礎学力も必要である。今回のメディフェスでも、市民メディア、コミュニティメディアの基礎的知識は必要であった。

しかしそれと同様に、あるいはそれ以上に、学生が地域に入るためには、汗を流した「業績」と、ともに協働した「仲間」が必要であることがわかった。「業績」は「成功体験」や「達成感」「自信」と言い換えることができるかもしれない。また「仲間」は、「関係」や「信頼」「承認」と置き換えられるかもしれない。

ただ、プレゼンテーションに優れることを目指すのではなく、安心して人前に立てる学生が教室で語り始めるためには、さまざまな形で学生自信が仲間づくりをしながら、何事かを成し遂げる体験を積み重ねることが背景にあって初めて、大学の教育力を発揮することができるのだとわかった。(了)

大規模講義内における対話を促すツールとしてのコミュニケーションカードの活用

社会科学系科目部会 妻木 進吾

1. コミュニケーションカード方式の有効性

受講生間／受講生-教員間の対話は、授業内容の理解を深める上で効果的である。そして、大規模講義でこうした対話を促すツールとして、コミュニケーションカード（以下、コミケカード）の活用が有効な方法の一つとなる。

人権論 A 2014 年 5 月 27 日分

誰がフリーターになるのか？
フリーターの析出と社会的不平等の世代間再生産

【1】 私は本当に恵まれているなあと思った。受けたいだけ大学を受けさせてもらって、本命の大学に落ちて、「お疲れ」と言ってくれる親の下に生まれた私は、すごく幸せ者だと思う。大学に入って本当にやりたい事がなかったし、なぜか分からないけど、いつの間にか楽しそうと思って選んだ商学部や経営学部を片っ端から受けて、でも公務員になるんやったら法学部や経済学部の方が有利だと出願後に気付いて、後期で換えて受けて落ちるって言うでしょうもない経験が恥ずかしい。塾も小4から高3まで行ってたし、掛け持ちで別の塾や家庭教師をつけてもらったり、私の教育費用は莫大過ぎて想像できません。本当に親に申し訳ないし、感謝の気持ちで一杯です。この授業を受けてたつづく思います。(1回/女)

【2】 私はいつもこの授業を受け終わった後、世界が広く見える。視野が広がる。私は今日の授業を受ける前、義務教育なのだから勉強は出来るのではないかと考えていたが、今日の講義を聞いて家庭環境というのは、非常に深く関わっているのだなと、胸に響いた。今このようにして、自分が学びたいだけ学んで、高校や大学を選ばせてもらえたのを考えると、恵まれていると思う。今こうして授業に出れる、勉強できるという環境に私はいる。このような生活をしたいとできない人がいる。身体的な面で大学等の新たなスタートを切ることができない人を私は知っている。そのような人たちのためにも、未来のためにも、責任を持って頑張らなければならない私は思った。授業で寝たり、スマホをいじったりするような人にはなりたくないと改めて思う。常に誰かに感謝をしていれば出来ない行いだなと思った。/今日話してくださった人々のインタビューと言うのは、どのようにしてアポを取ったりしているのですか？(1回/男)

→フリーターを比較的多く輩出している高校の先生に頼んで卒業生を紹介してもらったり、地域就労支援事業のスタッフにお願いして紹介してもらっています。

【3】 ……人の不幸や貧しい状況を見て、合理化して自分は幸せだなと確認してしまうのではなく、不幸であったり貧しい状況であっても頑張っている人の存在を知って、私はなんだかれしりを叩かれたような気がしました。親に何と自由な生活させてもらって、大学に行かせてもらって、好きなことをさせてもらって、免許を取りに行かせてもらって…大学で遊んでる場合じゃないです。気持ちを切り替えます。あと、特にコミュニケーションカードに書いてあった、4 回生の女性に感動して心動かされたので、その人の文章を胸に張り付いたと思いました。(1回/女)

【4】 家庭環境が複雑でとか、金銭面で進学が難しいだとか、という状況が、私にはかけ離れていて(何となく買ってもらったので)あまり想像ができません。大学進学はストレートでしたが、今年、大学5年目をしていると本当に恥ずかしいです。大学進学をあまり何がしたいという目標もなく進学し、何となくだらけてしまい、ここまで来てしまいました。周りの皆

2014 年 6 月 2 日
人権論 A

が卒業してやっと自分は情けないという気持ちが湧いて来て、授業も就活もやっと頑張っていますが、大学に進学できなかったり、ましてや高校進学できないと言う人がいるんだと思うと、自分は甘えているなと思います。……自分は留年しているしダメだと自信をなくすことが就活では一番いけないのですが、反省して親に感謝して卒業し、就職したいと思っています。私は恵まれているのだから頑張れると言うと、家庭の事情でフリーターなどをしている人に失礼な気はするのですが、私にはそう思わないと頑張れない、嫌な人間です…。(5回/女)

【5】 ……家庭環境は本当に人生への影響が大きいと思いました。夢を持つことさえ許されないかのようなこの状況は、自分も結構ではありませんが本当に想像ができません。何か根本的な日本のシステムが間違っているのか…。私は特に夢もなく、奨学金も自分で返済しないといけないこの大学生生活。遊んでばかりではダメだと強く感じ、このままではいけないと思いました。先生は人生を左右する決断(大学へ行くか、就職をするかなど)を、17,18 歳という若い子供の段階で強いられるのはどう思いますか？仕方のないことだとは思いますが、400 万円以上の借金を負う選択を、この年齢で決断しなければならぬのは私は重いと感じます。(1回/女)

→ぼくも重いです。「自分自身の選択」であるかのように当事者に思い込ませつつ、しかし実際には構造的に水路づけていく現状はとてもマズイと思います。

【6】 ……不安な未来を持ちながら、奨学金というプラスのリスクを背負わせてもらって勉強をしている今、大学生生活を頑張ろうと思直せる。先生がこの授業をする意図はこれですか？(1回/男)

→社会の中での自分の位置を知ることは重要だと思いますし、それによって頑張ろうと思うことももちろん否定はしません。ただ、それを意図している訳ではないです。「人権論」であるこの授業の狙いは別のところにあります。

「自己責任／自業自得」派

【7】 今の時代は、やっぱり努力が全てだと思います。家庭が少しぐらい厳しい状況であったとしても、大学や高校では奨学金という制度があり、しっかりと教育を受けることができます。……(1回/男)

【8】 家庭状況が悪いとか何とか言っているが最終的にはなんだんだん自分で自分の努力、気持ちの面だと思う。小学生的頃から勉強が嫌いとか、やってみないと分からないと思うし、人には向き不向きがあって、何か得意なものがあったかもしれない。また、お金の面で不安で入学しようとしたけれどやめたというのは、本気で行きたいと思ったら本気で頭を下げると思う。どちらにしても共通していると思うのは、本気が足りていないと思う。本気になれば何かしらの手段を探したり、自分でどうにかするものだと思う。最終的に自分への甘えが残っているのではないかと……。 (1回/男)

【9】 家庭環境など自分はどうにもしがたいこともたくさんあるが、学力など、小学校の勉強が分からないの寂しくないなど、言い訳にしか聞こえません。小学1年生でそこから学力差があるとは思われないし、本人がやるかしないかで、しなか

私が担当する人権論の授業における、コミケカード（講師控え室で配布されている罫線入り A5 サイズ）の利用方法は次のようなものである。まず、毎回の授業終了時に学生に授業について簡潔にまとめた上で、授業へのコメント、感想、疑問・質問などを自由に書くように求める。回収したコメントの多様さを反映する形で 40～50 人分をピックアップする。それをテキスト入力し、いくつかには教員からのコメントを付し、疑問や質問には極力返事を書いた上で、A4 で 4～6 枚まとめて、次の授業時に配布する（左の例を参照）。授業では、いくつかのコメントを紹介しつつ導入としている。

こうした方法は 1 クラス 300 人以上、多い時には 600 人を超える規模の講義において、受講生の質問機会を確保する必要性を感じて始めたのだが、継続していく中で、こうした取り組みが受講生間、受講生-教員間の対話を

促し、それが授業内容の多面的で深い理解に繋がっているように感じられた。掲載された受講生のコメントに対して他の受講生がさらにコメントをすることで、紙面上で白熱した議論が展開される。自分の書いたコメントが配布資料に掲載される可能性は、学生の授業へのコミットメントを強める。他の受講生のコメントを読むことで、コミケカードに書かれる内容の水準が上がる。「よりよいコメント」を書こうとして熱心に受講するようになる。これらさまざまな効果が顕著

に感じられたのである。

こうしたコミケカード利用の有効性について、以下に「個人的な有効性の感覚」を超える確からしさの根拠になりそうなものをいくつか示したい。まず、授業最終回(2014 年 7 月 22 日)のコミケカードの一部をその傍証として示す。

- ・ コミケカードをまとめていただけたのが本当に良いと思った。他の人の意見を知ることができたし、それが本当に面白かった。人の意見を知ることがここまで面白いと思ったことはない、というくらい面白かった。(1 回/男性)
- ・ コミケカードはすごくためになった。毎回受講生の意見がまとめられ、紹介されることで大学らしいディスカッションのようで、自分とは異なった意見を持つ人、考えもしなかった意見を持つ人、この教室ひとつだけでも様々な人がいることがわかった。(1 回/男性)
- ・ コミケカードのまとめを読むのが好きでした。他の人の意見は、自分が思っていたことと全然違うことを発見できたりするので、そこからまた疑問ができたり、新しい考えをもてたりできるので、とても良かったです。
- ・ (授業のたびに)自分に当てはめ、将来が心配になった。けれどもコミケカードなどで、多くの人の意見に触れることで、「あ、こんな考え方もあるんや」と問題を解決していく上でヒントになるようなことも多く発見することができました。……(1 回/男)
- ・ この講義を受け、私は自分の中の固定観念や偏見を見直すようになりました。授業内容はもちろん非常にためになったのですが、コミケカードによって、自分の疑問を提起したり、他の人の様々な意見を聞くことができ、本当に刺激的でした。卒論を書くにあたって、私のゼミの先生は、「驚きや感動など心を揺さぶる何かがないと、いいものは書けない」と言っていました。私は人権論 A を学んで、「私の卒論はこれだ!!」と思うほどの衝撃がありました。……(3 回/女性)
- ・ 全 14 回の講義を受けていて楽しみにしていたことは、受講生が書いたコメント集です。毎回毎回同じ講義を受けているのに、一人ひとりの考え方が違い、どれも考えさせるもの、おもしろいものがあり楽しみにしていました。……(1 回/女性)
- ・ コミケカードで他の学生や先生と意見のやりとりができるシステムも非常に面白く、意見を互いに評価することで理解もより深まった。(4 回/男性)
- ・ 他の受講者の人達の考えや体験談を見れてとても参考になった。私も 1 回だけのったことがあって、そのときはすごくうれしかったです。(3 回/女性)

また、「学期末の授業アンケート」で、自由設問として設定した「Q11. コミケカードのまとめを毎回読んだ」「Q12. このまとめは授業の学びに役立った」への回答(5 が最高の評価尺度)は、こうしたコメントが例外的なものではないことを示している。2014 年度人権論 A の 2 コマでは、Q11 の回答の平均は 4.2/4.1、Q12 は 4.3/4.3、人権論 B の 2 コマでは、Q11 は 4.2/4.0、Q12 は 4.3/4.2 だった。比較対象のない値であるが、コミケカードのまとめはよく読まれており、授業の学びに役立ったと評価されていると考えてよいであろう。

2. 継続を可能とする仕組みの必要性

コミケカード方式の有効性を学生は実感している。そして、それは受講生間、受講生と教員との対話を促すことで、授業内容の多面的で深い理解に繋がっている。しかし、少なくとも 100 人、多いクラスでは数百人といった大規模講義のコミケカードのまとめを毎週作成するのはそれほど容易ではない。たとえば、2014 年度の後期の人権論 B の 2 コマの場合、(1)コミケカード 250 枚程度から 40～50 枚をピックアップする作業に 3 時間程度、(2)そのテキスト入力に 3 時間程度、(3)組版と疑問・質問へのリプライに 2～3 時間程度、合計で毎週 8～9 時間程度の作業が必要となる。コミケカードの活用は、授業内容の多面的で深い理解を促すが、相当の時間と労力を要する方法でもある。コミケカードの活用を継続していくためには、また今後拡がりをもつためには、

時間と労力というコストをできる限り削減する必要がある。今回の FD 研究開発プロジェクトではいくつかの方法を試みた。

2-1. 外部化

上記の(1)～(3)の中で、(1)と(3)については工夫の余地はあっても、大幅な省力化は難しい。一方、(2)のテキスト入力についてはアルバイトに頼むという外部化により、大幅な省力化が可能である。今年度の人権論では、ピックアップした 40～50 枚のコミケカードをスキャナで読み込み、作成された PDF ファイルをアルバイトの学生に送付し、テキスト入力を行ってもらった。自動給紙機能付きスキャナとインターネットの利用により、(2)に関しては私自身が要する時間はほとんどなくなる。なお、PDF ファイルは受講生の氏名／学籍番号等については削除し、本文のみを送付している。

ここで問題となるのは、テキスト入力に対する謝金である。1 回 3 時間として、時給 900 円で 2,700 円、半期 14 週で 37,800 円が必要になる。今年度は、FD 研究開発プロジェクトの予算から支出できたが、こうした予算がない場合、この金銭的負担は問題になるだろう。「教育補助員」制度の利用も考えられるが、半期 1 科目の上限金額は 22,500 円と必要金額を下回る。また、受講生数が 150 人を下回った場合、そもそもこの制度は利用できない。何らかの予算的な裏付けがあれば、コミケカード方式を行う時間的・労力的コストは低減し、その継続とより一層の拡がりも可能となるだろう。

2-2. 半自動化

このような作業の一部外部化を行っても、まだ時間的・労力的コストは過大であるが、上記(1)～(3)に関しては、これ以上の大幅な削減の余地が見いだせなかったため、後期人権論では、これら以外の部分で必要となる時間と労力の削減を試みた。具体的には、成績評価に関わる平常点管理を、マークシート方式の導入により半自動化することを試みた。

紙のコミケカードを用いた出席管理は、エクセルなどへの入力作業に長時間を要する。携帯電話を用いた Web 出席管理は入力作業が不要ではあるが、空出席する学生が少なくないため、出席管理の方法としては課題が残る。

そこで、従来から用いられている紙のコミケカードの一部にマークシート方式を導入することにした。学生がコメントや氏名等を書く欄は従来通りとし、新たに学籍番号をマークシート方式で記入するマーク欄を設けたのである。このマーク欄付きコミケカードを印刷機で A5 サイズに印刷して使用した。授業終了後、回収したマーク欄付きコミケカードは、①自動給紙装置 (ADF) の付いたイメージスキャナ (富士通 ScanSnap iX500) で画像ファイル化し、それを②普通紙マークシート処理ソフト「Area61 マークリーダ」(シェアウェア：11,828 円(税込)) で処理し、エクセルファイル化した。

	枚数	所要時間 (分)	所要時間(秒) 1 枚あたり	所要時間(分) 100 枚あたり	所要時間(分) 200 枚あたり	所要時間(分) 300 枚あたり	所要時間(分) 400 枚あたり
手入力	435	71	9.8	16.3	32.6	49.0	65.3
マーク方式	227	7	1.9	3.1	6.2	9.3	12.3
差			7.9	13.2	26.5	39.7	53.0

2014 年度後期を通じてマーク方式を導入した結果、試行錯誤があったが、最終的には上の表の通り、入力に要する時間を手入力の 5 分の 1 程度に短縮できた。1 学期 15 週で毎回 500 人の受講生の出席管理が必要な場合、手入力だと延べ 20.4 時間かかるが、マーク方式では 3.9 時間で済み、およそ 16.5 時間の短縮が実現することになる。

マーク方式導入にあたっては、マーク付き受講シートの作成にはいくつかのコツと注意深い作業 (印刷や裁断) を要する。受講シートの作成精度がマークリーダでの読み取り精度に影響する

からである。講師控え室で配布されているコミケカードや、大学教育開発センターで作成しているミニツッペーパーの新デザインとしてマーク方式が採用されれば、より多くの教員が利用しやすくなり、出席管理の効率化、ひいては龍谷大の授業力向上に資するのではないと思われる。

なお、マーク方式自体は、受講シート以外にも、出席カードや小テスト、レポートなどの管理にも応用可能である。また、出席カードにマーク方式を導入すれば、その管理に要する時間の削減効果は受講シートへの導入よりもさらに大きくなる。

人権論 B																								
学籍番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0					
学年	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	西暦	年	月	日	期	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
科目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	氏名														
氏名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨															
氏名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨															

検閲はみ出し厳禁

1

20150106(95%)

3. まとめ

コミケカードの活用は、大規模講義で受講生間／受講生-教員間の対話を促すことで、受講生の授業内容理解を深める上で効果的である。しかし、そのために教員に求められる時間的・労力的な負担は過大である。継続的、あるいは拡がりをもったかたちでこうした取り組みを展開するためには、負担の低減が不可欠である。今年度の FD 研究開発プロジェクトではそうした負担低減策として、作業の外部化と半自動化を試みた。外部化については、予算的な手当が継続的に必要になるが、それによって負担軽減効果は大きい。半自動化については、より少ない予算

の一度の支出で、継続的に負担軽減が実現できる。

FD に教員の熱意は不可欠なのかもしれないが、それにのみ依存する FD は持続性も拡がりもたない。持続可能で拡がりをもった FD 実現には、不必要な労力を極力削減することが不可欠である。今回の FD 研究開発プロジェクトを通して確かめられたことは、わずかばかりの制度的支えであつてもその実現に大きな意味を持つということである。

「異文化」「他者」と出会う—— 釜ヶ崎スタディ・ツアー

社会科学系科目部会 妻木 進吾

昨年度に続き、人権論 B の受講生に呼びかけて、NP0 釜ヶ崎再生フォーラム「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」に参加した。紙幅の都合により概略のみ以下に記す。ツアーには 2014 年 1 月 10 日、人権論 B の受講生を中心に 9 名が参加した。西成プラザでの再生フォーラム平川隆啓氏による事前レクチャーを経て、平川氏の案内により釜ヶ崎のまちのフィールドワークが行われた。あいりんセンター1・2 階、NP0 釜ヶ崎、四角公園、子どもの里、三角公園など、釜ヶ崎とホームレス問題のこれまでとこれからについてレクチャーを受けつつ巡った。最後に、サポーターハウス「おはな」にて、オーナーと元ホームレスで現在、生活保護受給中のおっちゃんガイド 2 人から、生活史が語られるとともに、学生へのメッセージが寄せられた。その後、懇談・質疑応答の時間が取られた。昨年度同様、実証的根拠に基づく論理的理解を促す授業展開の工夫と共に、学生が多様な人々と出会う機会を提供することの重要性を再確認することになるツアーであった。

